

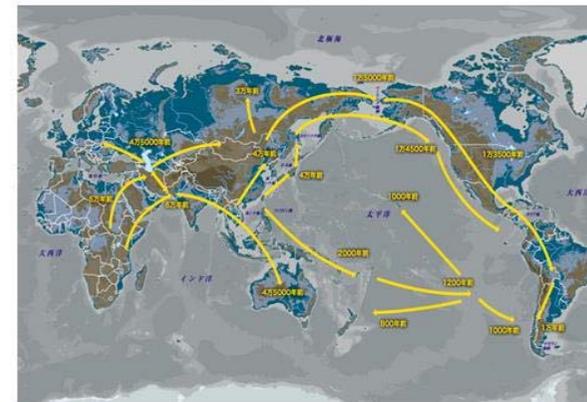
# 国際医療福祉大学

グレートジャーニー 辺境の医療・保険事情

関野吉晴  
武蔵野美術大学教授  
(文化人類学)  
2018. 4. 19

- 1. ベネズエラのアマゾン奥地、ヤノマミ。ここではシャーマンがジョボという幻覚剤を吸ってトランス状態になったシャーマンが治療をしていました。
  - 2. 南米ボリビアの薬草の谷と言われている、アマレット村の治療。
  - 3. エチオピア南部、エチオピア正教徒ではなく、アニミズムを信奉するブラックアフリカンのコエグ。
  - 4. チベット医のいるネパールヒマラヤのドルボ地方
  - 5. ペルーのインカ帝国の首都だったクスコ近郊でインカ時代さながらの暮らしをし、アルトメサヨックという呪術師がいるケロ村。
- 彼らの診療活動を通して、伝統社会の健康と医療について考えてみたいと思います。

## 人類の大移動と文化



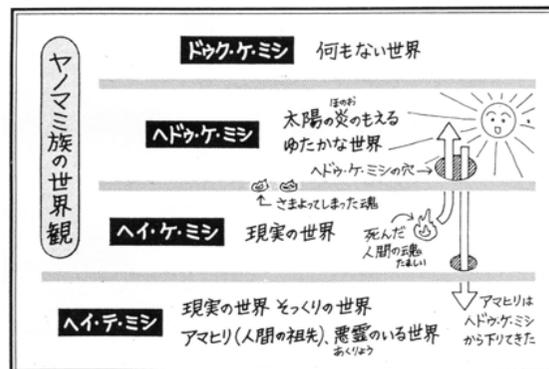
## ヤノマミ・シャーマニズム





死因	男	女	計	%
気管炎・肺炎	4	8	12	4.0
ヘビに噛まれた	1	0	1	3.3
原因不明	4	4	8	26.6
老衰	1	0	1	3.3
戦傷	1	0	1	3.3
ジャガーの襲撃	0	1	1	3.3
下痢	0	2	2	10
出産	0	1	1	3.3
蜂	0	1	1	3.3
瘧疾	1	0	1	3.3
計	12	18	30	100

死因	男	女	計	%
マラリア及伝染病	58	72	130	54.2
赤痢と下痢	16	5	21	8.8
戦傷	33	6	39	16.2
ヘビ咬傷	2	3	5	2.1
呪病	15	10	25	10.4
ジャガー	1	0	1	0.4
解毒伝染	3	1	4	1.7
ハマハリ	1	2	3	1.2
老衰	4	0	4	1.7
股の付け根の苦痛	3	0	3	1.2
出産	0	3	3	1.2
その他	2	0	2	0.8
計	138	102	240	99.9



## アマレット(薬草の村)アンデス

- カラワヤはボリビアの伝統医療の治療師の間でも特別な地位を与えられている。
- カラワヤはおよそ300の薬草の知識を持っている。中には600も知っているものもいる。
- 病気の原因はアハユ(生命力)が肉体から離れるから。
- 大事なことは肉体と精神の均衡を回復すること
- 同じように、重要なのは人間・自然・超自然のあいだの均衡



## エチオピア南部・コエグ

- 診療を通じて文化が分かった平等社会
- 500人の弱小民族

- 患者が礼を言わない社会
- モノ、知識、技術を出し惜しみしない社会。
- ベルモ関係、年齢階梯(通過儀礼)
- 集うこと、贈り物をしあう
- 将来の安全保障





• 大便から見た、コエグの身体観

ヒマラヤ







アンデス高地



## アンデスの呪術師マヌエル

- ケロ村に滞在しているとき、仲良くしてくれていた村人が頭痛を訴えた。
- 私に薬を要求してきたので、鎮痛剤を与えた。
- 一時的には治まるが、すぐに再発した。彼は村一番の呪術師マヌエル・キスペを訪れた。

- マヌエルは袋の中から慎重に形の良いコカの葉を選びすぐった。
- それを束ねて天にかざして、神々に祈りながら、風呂敷大のリキヤという手織りのマントの上にコカの葉をばらまいた。
- 葉の散らばり方を見ながら病人と会話を進める。

- 「おたく、最近カミサンと喧嘩したんじゃないの」
- と最初は病人のおかれている状況を占師さながらに言い当てる。
- 病人は答える。
- 「実は一番上の息子が大きくなって、町に出て働きたいと言い始めたんだ。オレは賛成、カミサンは反対。そのことで毎日喧嘩さ」
- 

- マヌエルは再びコカの葉をばらまいた。
- ここでは病の原因も超自然的な力によるものと考えられている。
- この超自然的なもの、つまり神々とコカの葉を通して対話ができ、意思の疎通ができるのが呪術師だ。
- 呪術師と病人の会話は続いた。
- 

- 「あなたの息子の行こうとしている町は方角が悪い。別の方角に行ったほうがよい」
- と言った後、コカの葉、トウモロコシ、獣脂、砂糖、薬草、乾燥させたリヤマの胎児を紙に包んで焼いた。山の神アプ、大地の女神パチャママへの贈り物だ。
- 息子は結局、別の町に出ていくことになった。呪術師の処方神々の御託宣でもある。カミサンも従わざるをえなかった。
- やがて男の頭痛もすっかり消えた。
- 

- インカ帝国の首府だったクスコの町には呪術師が三千二百人もいる。
- 医師の数よりも圧倒的に多い。
- 患者も多いが、その中には近代医学を学んだ医師の数も多いという。